

人文会ニュース

jinbunkai news
September 2025

NO. 150

1 代表幹事挨拶

片桐幹夫

2 人文会の活動を振り返って

田崎洋幸

4 人文書を好きな人が増えたら、

中村隆之

世界は今よりもよくなると思いませんか

14 「人文会ニュース」一五〇号記念号によせて

何でも置ける人文書棚をいかに作るか

東二町順也

16 人文書を売るということ

大屋恵子

18 人文会とのご縁と、人文会ニュースへの期待

児玉真也

20 効率と非効率の狭間で——知識と智慧について

西村仁志

22 人文会ニュース目次再録（121～150号）

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告



www.jinbunkai.com
150号記念号

方無ケネル

人生というクソゲーを 変えるための仏教

仏教は人生というクソゲーから降りる方法を教えている。理屈っぽいドイツ人禅僧が原始仏教、大乘仏教、親鸞、道元までを読み解く異色の仏教入門書。

2200円



人生というクソゲーを
変えるための哲学と坐禅

哲学者永井均の永井哲学と坐禅が、人生というクソゲーを終わらせる終わらせ方と、終わったところから何が始まるのかについて考察する。

2420円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6 (税込)
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

「ありのまま」の身体

メディアが描く私の見た目

藤嶋陽子

「ありのまま」は美しく、難しい。「ありのまま」が肯定される時代で折り合いをつけながら生きる人のための必携書！

2420円

考古学の大発見を めぐる八つの冒険

マイケル・スコット

地図にはい道を行け！ あくなく探究心で時代を切り拓いてきた考古学者たちの知られざる物語。

3520円

京都出町のエスノグラフィ

有馬恵子

ミゼノマの商世界

半徑3キロメートルから描きだされる濃密なフィールドワークから、まちのざわめきと響きあう声が聞こえてくる。

4620円

青土社 東京都神田神保町 ☎ 03-3294-7829
http://www.seidosha.co.jp/ (価格税込)

感覚・知覚心理学 ハンドブック 第三版

和氣典二・重野 純・村上郁也 編

『感覚・知覚心理学ハンドブック』の第三版が登場！これまでの研究から最新の知見まで、国内外の感覚・知覚研究を一冊に網羅。 57200円

「教育改革」は 何を改革してきたのか

学校と教育の現在(リアル)

児美川 孝一郎 著 間断なき教育改革の過程を検証することで見てきた、日本の教育に刻み込まれた特質に迫る。新自由主義的な教育改革のゆくえを考える。 1980円

トラウマから自由になる

自分を取り戻すための認知処理療法

パトリシア・A・リーシック 他著 伊藤正哉・高岸百合子・片柳章子 他訳 トラウマ・PTSDへの治療法としてエビデンスが認められた認知処理療法のワークブック。 4290円

誠信書房
SEISHIN SHOBÔ

Tel 03-3946-5666

東京都文京区大塚 3-20-6

創元社

ネアンデルタール人 再発見

D・パバギアーニ・マイケル・A・モース 著

篠田謙一『監訳』 武井摩利訳

A5判変型・上製・二五六頁・定価5280円

私たちのDNAにはネアンデルタール人の痕跡が一部残されている。彼らの文化・行動・遺伝子を通して「ヒトとは何か」を探る。

■二〇一五年アメリカ考古学協会図書賞を受賞

大阪市中央区淡路町4-3-6 (税込)
TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111

代表幹事挨拶

みずず書房 片桐幹夫

2025年5月16日に開催されました人文会年次総会において、代表幹事を拝命いたしました。これからの一年、何卒よろしくお願い申し上げます。

あわせて、役員人事についてご報告申し上げます。広報委員会委員長として長年にわたりご尽力いただき、「人文会ニュース」の充実と定期刊行を担ってくださった白水社・岩野忠昭氏が退任となり、新たに慶應義塾大学出版会・乙子智氏が委員長に就任されました。その他の幹事はすべて再任となっております。

また、会員社の動向として、日本評論社が復会された一方で、残念ながら晶文社、平凡社、法政大学出版局の3社が休会されましたことをご報告いたします。

今日、テクノロジーの進歩、特にAIの急速な発展が、私たちの暮らしや思考に大きな影響を及ぼしています。こうした変化のただ中であって、人間の思索の基盤を耕す「人文知」は、今こそ大きな意義を持つものと考えております。

一方、書籍制作の現場では、印刷・製本費の高騰、物流経費の上昇、そして書店数の減少など、多くの課題が山積しています。このような時代において、人文知を伝える人文書をいかにして多くの方々に届けるかは、出版業界や人文書の世界にとどまらず、社会全体、さらには国にとっての課題とも言えるのではないのでしょうか。

人文会では本年度も、書店様、図書館様、流通関係の皆様と協力し、意見交換を重ねながら、読者の皆さまに人文書の奥深い魅力をお伝えするため、積極的な活動を展開してまいります。

本年も、役員ならびに各委員への変わらぬご指導・ご鞭撻を、何卒よろしくお願い申し上げます。

人文会の活動を振り返って

田崎 洋幸（前代表幹事、みすず書房）

人文会ニュース一五〇号が発行されたことを大変うれしく思います。先達からの遺産を継承することは大変な重責でしたが、無事に次の世代に引き継ぐことができたことは望外の喜びです。今後も人文会の活動が継続されますよう、会員各社のご尽力とともに、関係各位には引き続き、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

昨今、出版業界は厳しい状況におかれています。それぞれの社の努力だけでは如何ともしがたいことも多くあり、頭を悩ませていることと思います。解決策を模索する際に過去を振り返ることでヒントが呼び起こされることもあるように思いますが、そのためのツールとして人文会ニュースが役に立つと思います。人文会ニュースは書店・図書館・販売会社・出版社の様々なアイデアや施策を公開している冊子であり、最新号はもちろん、バックナンバーにも多くのヒントが隠れているように思います。歴史を確認することで現状を再認識する作業は決して無駄ではないように思います。人文会のホームページでは、一九七三年に発行された第一号から最新号までをPDFで公開していますので、ぜひ一度、目を通されてみてはいかがでしょうか。また同じくホームページにある、「人文書販売の手引き」「第三版」もぜひ、参考にしてください。人文書のご担当者に向けて制作した実務マニュアルであり、初心者からベテランまで、多くの方にご利用

いただいています。人文書のご担当者は必読です。PDF版をダウンロードすることができますので、ぜひご利用ください。

関係者の皆様、人文会にはオーダーメイドに対応可能な知恵と経験があります。今後も引き続き、よろしくお願いいたします。

人文書を好きな人が増えたら、
世界は今よりもよくなると思いませんか

中村 隆之（環大西洋文化研究／早稲田大学教授）

人文学の研究者は人文書好きである。私を含め、周りを見渡してそう思う。

かつて恩師にこう言われたことがある。研究者になるなら三度の飯よりも本を読むことが好きじゃないと。この指針にあたかも従うかのように、大学生の頃から今に至るまで、私は人文書を買いつけていた。本といえば人文書を指し、そうしたもののばかりを読み、書いたり訳したりしてきたのが、わが半生だ。

なかには「そんな本を誰が読むの」と思われる本も書いたり訳したりしているが、それでもなぜか届くところに届いていくのだから、人文書とはつくづく不思議だ。また、買い逃してしまっ
て新刊では入手できない場合が増えてきているからこそ、版元の倉庫に眠っている一〇年以上前の本が新刊で買えたときの喜びはいや増している。

こうしたささやかな経験に照らせば、かつて今も人文書は細く長く読者に届けられているのは間違いなく、人文書の世界は、網目状に張り巡らされたリゾーム状のエコシステムをなしながら、少数の発行部数によるバラエティに富む品揃えでもって、毎月、新陳代謝を繰り返していると言えそう。

とはいえ、研究者以外の人文書の読者は、年々減り続けているのも事実だろう。まだそんな歳でもないのに小言を言えば、今の学生は、私の学生時代の一九九〇年代と比べた場合は当然のこと、二〇一〇年代の学生と比べても本を読まないし、買わない。勤務校の生協の書店が賑わうのは教科書販売のときだけで、定期的に生協の書店に足を運ぶ学生は、やはり減少傾向の人文系大学院生を別にすれば、「絶滅危惧種」だ。早稲田大学ですらこうである。

さらに残念なことに、新刊期間の過ぎた多くの人文書は、返本を免れた場合でも書棚に差されたまま、なかなか動かない。大学図書館でも同じだ。本たちは本棚で買われたり借りられたりするのを待ったままだ。図書館の本に至っては、何年も貸し出しされないものなど、ざらにある。

たしかに人文書にとっては売れ行きは最重要の価値基準ではない。しかし、この世界の主要な価値基準がお金であり、稼いでもうけることがなにより大事であるという価値観を内面化する日本人が再生産され続ける結果、人文書の読者がますます減っているのも否めないだろう。

それだけではない。これは人文系の研究者にも由々しき問題だ。なぜなら国家や公共の利益に直結しないとみなされがちな人文系の学問は、経済的合理化の波にますます抗えなくなっているからだ。

そうであるならば、これからの人文書を考えることは人文学の未来を考えることにもつながる。本誌の主たる読者は出版関係者、とくに書店員や図書館員の方々だとすれば、本稿の著者と本誌読者をつなげる共通の属性は、なによりも「人文書の読者」ということになるだろう。本稿ではみなさんと人文書の今後についてささやかながら考えてみたい。

人文書というジャンル

人文書というジャンルは人文学を基盤にしている。人文学は英語の「ヒューマニティーズ」、逆れば、ラテン語の「フマニタス」の訳語だ。日本語の「人文学」が「人」を冠するとおり、人間をめぐる諸学に基づく本を私たちは「人文書」と呼んでいる。

狭義には、人文書とは、文学、哲学、宗教学、歴史学、言語学、人類学、民俗学、美学、精神分析学などの人文知の専門家が書いたものを指す。しかし、人文知のエリート主義、西欧中心主義、植民地主義、性差別・人種差別主義など、人文知を内側から問うてきた、カルチュラル・スタディーズ、ジェンダー・セクシュアリティ研究、ポストコロニアル研究といった批判的な人文知も、現在では人文書の重要な一角をなしている。

さらには人文知の担い手は、大学人や研究者にかぎられない。アカデミアの外で活躍する、いわゆる在野の書き手の人文書での存在感は強まる一方だ。こうした書き手の活躍の場は、手堅い専門書よりも、幅広く読者に届くことを目指すような出版社の企画編集によってもたらされ、高い人気と評価を得ている。

人文書の幅は出版形態とも切り離せない。A5判（ハードカバー）、四六判（ハードないしソフトカバー）、選書、新書あるいは文庫（以上は基本的にソフトカバー）というフォーマットによって、発行数やターゲットの読者層も決まっている。上から下へと読者層も部数も増えていくにつれて、定価も抑制されていく。専門家が限られた読者に向けて書く専門書がA5判、人文知がもっと

もバラエティに富んだ品揃えを見せるのが四六判、ソフトカバーの選書や新書は人文知を一般読者に開いたものであり、文庫とはクラシックと認定された人文書の普及形態だと言えるだろう。

それゆえ人文書の生態学はマーケットと無関係には存在しえない。版元からすればまったく売れないのはやはり困る。どんなに学術的意義があろうとも、各フォーマットにに応じて想定読者数を見込めない場合には出版事業は成立しない。

しかし、学術的意義と読者の獲得が比例しない研究も当然ある。そうしたときに大いに活用されるのが各種の出版助成金だ。

このように、人文書が隣接するほかのジャンルと大きく違う特徴は、人文書には固有の学術的意義が認められている点にある。市場経済の論理のなかに組み込まれている出版業界にあって、それでも人文書の刊行が続けていけるのは、なによりも、営利を至上目的としない出版社・書店・図書館で働く人々の尊い志があつてこそである。縮小傾向にある出版業界に身をおき、なおも人文書に携わる人々は、そもそもお金という価値観よりもはるかに大事なものを人文書のうちにおそらく見出している。この大事なもののこそ、私たちが考えるべきことだろう。

デジタル・テクノロジー時代の人文書

ただその前に、人文書を取り巻く現状が、知識と情報がデジタル・テクノロジーのなかにすっかり包摂されたことで、かつてよりも一層、厳しい状況になっていることを確認しておきたい。

デジタル・テクノロジーと出版の関係を考えるにあたって参考になるのが、ジョン・B・トン

ブソン『ブック・ウォーズ』（久保美代子訳、みすず書房、二〇二五年）だ。デジタル革命がどのように本の生態系を変えたのかを検証するこの人文書は、電子書籍と紙媒体が共存するようになった経緯や、電子書籍化のジャンルごとの向き不向きや、電子書籍を通じたアマゾンのマーケティング戦略などを分析している。この本のなかでなによりも重要だと思うのは、デジタル革命と巨大グローバル企業アマゾンの出版界への参入以降、各出版社が読者のニーズをより一層考え、工夫することの必要性を説いている点だ。

このことは完全にそのとおりなのだが、その一方で、人文書にかんして私は別の観点からも危惧している。

デジタル革命以降、グーグル・スカラーの存在に示されるとおり、知識と情報がデジタル空間に際限なく集約されてきた。さらには、欧米の潮流を受けて、日本でも学術的成果の無料公開が進められている。人文系の博士論文から学会誌や紀要掲載の論文まで、デジタル空間で無償（海外の学術誌や専門書は有償の契約）で提供されている。

さらには国会図書館のデジタルコレクションによる無料公開も加わり、多くの知識と情報は、人文書をあえて紙媒体で買い求めなくても入手できるという環境に私たちは生きている。デジタル化による知の公共化と人文書の関係が今後どうなるのかを注視していかなければならない。

同様に、人文書のなかで重要な位置を占める翻訳の役割も再考を迫られるかもしれない。英語やフランス語で書かれた最新の人文書や論文は、その大意を知るだけならば、現時点でも生成AIの自動翻訳で十分だ。この点で興味深いのは、高度な自動翻訳機能が人間の翻訳に与える影響である。さまざまな点を考慮する場合、翻訳の質が向上するともかぎらない、と私は危ぶん

でいる。

人文書の価値

とはいえ、この急激な知のデジタル化によって人文書がただちに減ぶことはないだろう。人文書はやはり紙との相性がよい。『ブック・ウォーズ』が証明するように、紙媒体の本のニーズは電子書籍の定着以降も、当初予想されたようには大幅に減じなかった。音楽におけるヴァイナル復活を彷彿とさせるように、紙媒体で購入したい読者はこれからも一定数いるだろうし、人文書ではその傾向は著しいだろう。

では人文書の価値とはなんだろうか。たしかに学術的価値は重要である。さらに出版のために市場における商業的価値もいくらかは必要だ。しかし、人文書に求められるもっとも重要な要素、すなわち人文書を愛好する私たちが希求するものとは、社会的価値観を刷新するような、読むことの可能性ではないだろうか。

私たちが人文書に期待するのは、特定の分野による特定の学術的貢献というよりも、私たちの思考を触発し、知性と感性に働きかけ、社会的通念を揺るがし、従来とは別の視点を獲得させるような可能性だろう。

最近読んだ本のなかで衝撃的だったのは、保刈実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』（岩波現代文庫、二〇一八年）だ。著者の早逝も本書に対する高評価もずいぶん前から知っており、文庫化を機にすぐに購入したものの、冒頭の「ども、はじめまして」の出だしに、さすがに「ども」

はないだろうと何度も開いては閉じて書棚に戻してきた本だ……。

今ではこの早逝した著者の熱心な読者になってしまった。出会うのにずいぶん時間がかかった。本との出会いには、各人の人生と探究にとつての時機があるということだ。

この人文書の魅力は、オーストラリア先住民の歴史研究の立場から、歴史という営みを「歴史学」という学問領域から、人々が日々おこなう「歴史実践」へと大きく広げたことにある。この流れで、書名だけの紹介となるが「人類史を根本からくつがえす」という副題どおりのデヴィッド・グレーバー、デヴィッド・ウエングロウ『万物の黎明』（酒井隆史訳、光文社、二〇二三年）や、グレーバーが依拠するアメリカ先住民文化が合衆国憲法に与えた意義を解明したドナルド・A・グリンデ・ジュニア、ブルース・E・ジョハンセン『アメリカ建国とイロコイ民主制』（星川淳訳、みすず書房、二〇〇六年）も、私たちの思考を揺さぶり、私たちの視点を大胆に変えることを促す人文書だ。エドワード・W・サイード『人文学と批評の使命』（村山敏勝・三宅敦子訳、岩波現代文庫、二〇一三年）もここで想起するならば、人文書の意義とはこの世界を批判的に問うことのうちにこそあると言えよう。

私の研究とかかわるところでは、現在、カリブ海やアフリカの思想をはじめとする非西欧文化の視点から論じる人文書が日本で注目を集めている。このことは、人文知の組み直しが世界規模で起こっていることの証左だろう。このような非西欧文化の視点による人文書が今後も継続的に出版されることは、私たちの知性と感性のあり方を確実に変えていくだろう。

それとともに現代の戦争、貧困、気候変動、植民地主義や人種主義からどのように脱却できるかを考え続けることは人文知共通の課題だ。そのために重要なのは、分業化した専門知から脱却

するような知的冒険ではないだろうか。私の見るところ、デジタル・テクノロジーは人文系の書き手が取り組むべき重要な課題だ。端的に言って、人文書の基盤をなす人間の存在自体が根底から問われ、人間の条件が大きく変容しているのである。

私たちにできること

少し抽象的な話になってしまったので、最後に人文書の読者として私たちにできることをささやかながら記そう。

重要なのは、人文書好きを増やすために、読者を育てることだ。読者会を開催するといった、読書のコミュニティを組織することは比較的敷居が低く、遠隔会議システムを使ってすぐにできそうなことだ。ある傾向の本が好きな人たちと読むことは、その性質上孤独な行為である読書において、重要なコミュニケーションの場をつくることでもある。

知り合いをブック・トークなどのイベントに誘うのもよいと思う。人文書と出会うさまざまなきっかけをつくってみるということだ。

この点でいろいろ仕掛けることも大事だ。人文書にかんしては旧Twitter(現X)が主要な情報媒体であり続けている。ちなみに私はそこでのアカウントを主に本の紹介に利用している。それでわかったことがある。実は関係者でないかぎり、多くの人は毎月出版される人文書の情報をほとんど知らない。つまり、知ってもらうことで手に取ってもらえる可能性はいまだに十分にあると言える。

以上はどれもだれかが実践していることであり、目新しいことはなにひとつない。逆に言うところ、こればかりは特効薬がなく、地道に活動していくほかないのだ。そうした努力を続ける人がどのくらいいるかで、これからの人文書の読者数は変わるだろう。希望は私たちのこうした継続的な活動のうちにある。

ただし、努力に無理は禁物だ。義務感をもってやるべきではない。そうではなく、楽しめること、自分にとってクリエイティブであることが大切だ。人文書を好きな人が増えたら、世界は今よりもよくなると思いませんか。そんな前向きな心持ちで人文書を軽やかに普及していこう。

中村 隆之（なかむら たかゆき）

カリブ海フランス語圏文学の研究からはじめ、アフロ・ディアスポラおよびアフリカ人の文化に関心を持ちながら研究中。

ひとつのことを深く突き詰めるよりも、諸要素の連関に注目する横断的思考スタイルを好むことから、本稿のとおりデジタル・テクノロジーによる人間の条件の変容を考えることが目下の課題。単著は小さなものをふくめて八冊。最新作は『ブラック・カルチャー——大西洋を旅する声と音』（岩波新書、二〇二五年）。勤務先の早稲田大学法学部ではフランス語と一般教育科目を担当。人文書普及のために、法学部教員による学生・一般向けのブックトークを今秋から企画・開始予定。乞うご期待。

「人文会ニュース」一五〇号記念号によせて

紀伊國屋書店新宿本店 東二町順也

三省堂書店名古屋本店 大屋恵子

長崎書店 児玉真也

丸善仙台アエル店 西村仁志

(五十音順)

何でも置ける人文書棚をいかに作るか

東二町 順也（紀伊國屋書店新宿本店）

人文書担当として何年か働いてきたが、よくある悩みの一つに「この本はいつどこに置けばいいのか」というのがある。

例えば2018年にみず書房から発売された『タコの心身問題』。

タイトルだけ見るとタコの本だが、副題は「頭足類から考える意識の起源」となっており著者のピーター・ゴドフリー＝スミス氏のプロフィールは「シドニー大学科学史・科学哲学スクール教授」と書かれている。

さらに内容情報には「心は何から、いかにして生じるのだろう。進化は「まったく違う経路で心を少なくとも二度、つくった」。一つはヒトや鳥類を含む脊索動物、もう一つがタコやイカを含む頭足類だ。」となっており、タコの本として自然科学のコーナーに置くべきなのか、心身の本として心理学のコーナーに置くべきなのか、それとも著者のプロフィールから科学哲学のコーナーに置くべきなのか、どう判断すれば良いのか悩んだ書店員もいたのではないだろうか。

この悩みの原因として人文書の定義が広すぎるのがあるのではないだろうか。

そもそも（当店における）人文書とは「哲学・思想、心理、宗教、歴史、社会、教育学、批評・評論」のジャンルに該当する書籍（紀伊國屋じぶん大賞HPより）としているが、これらの分野を

一切含まない書籍など存在するのだろうか。

小説や漫画にも人間の著者がいる以上、著者の伝えたい「思想」が必ず入っているし著者の「思想」が入りそうにない自然科学書も「人類が自然をどのように認識してきたか」という内容の本として解釈することができる。

つまり人文書のコーナーには「担当者の解釈次第でどんな書籍も置くことができる」ということになる。

だからこそ、人文書の棚は担当者の解釈（個性）が表現される（されてしまう）ことになる。個人経営のいわゆる独立系書店に人文書が多いのはこのようなことが要因なのではないだろうか。

問題は「本人が望まなくても個性が表現されてしまう」点であり、あまり経験の無い担当者が人文書を担当してしまうとそれが棚にも反映されてしまい、いわゆる「分かってない棚」ができてしまったり、自分を表現するのが苦手な人が人文書を担当すると「誰がどう見ても人文書の書籍しか置かない」と他の分野の担当者ともめたりしてしまうのだ（かといってチェーン店で担当者が個性を表現しすぎるとそれはそれで問題が発生するのだが）。

そんな人文書担当の助けになるのが「人文会」の存在である。

「人文会」が存在するだけで、担当者にとって「人文会」の出版社から出ている本だから」という選択肢が増えるのはとてもありがたいことだ。おそらく「内容はよく分からないけどみずず書房の本だから人文書に置く」ことをした経験のある書店員は何人かいると思う。

「人文会ニュース」150号おめでとうございます。

これからも人文書担当者の助けとして活動を継続できるようにお願い申し上げます。

人文書を売ること

大屋 恵子（三省堂書店名古屋本店）

私が勤務する三省堂書店名古屋本店は、名古屋駅にあり、タカシマヤゲートタワーモールという百貨店の8階にあります。勿論、モールというからには、入居しているお店の雰囲気も華やかで新オープン店舗が並び、お客様も時代に敏感で若くいらっしゃいます。私たち自身もまだオープンして8年という新米書店です。

人文会の「人文書フェア」までさせていただいている理由は、神保町にある本店が「いったんしおりを挟みます」宣言で仮営業することになったことで、毎年恒例だったという人文書フェアをこちらのお店でさせていただけることになったんだよ、ということだそうです。ありがとうございます。

その当初は「神保町からきた人文書フェア」のタイトルに、神保町の知名度は愛知県にないという擦り合わせをして「本の町、神保町からのフェア」としてはじめたという話も聞きました。本好きの私からは憧れの聖地ですが、神保町は確かに愛知県では馴染みはないのです。

まだコロナ禍を通り過ぎたあたりのころ、実用書との兼任となり、人文書とはなんなのだろうという疑問を抱えながら、人文書担当になった私が決めたことは、「成長すること」です。また一緒に足を運んでくださるお客様にも人文書とはなんなのだろう、を知ってもらうことにしよう

と決めました。

だからこそ「仕掛けは優しく」。

私自身が、初めまして、なのだから初めましてを販売しよう、と仕掛けを考えることにしました。

1年目は『嫌われる勇氣』ダイヤモンド社を。

2年目は『愛するということ』紀伊國屋書店。

2年目でお客様と一緒に販売ができていたのではないかと意識できるようになり、人文会フェアも年を追うごとに販売が伸びました。フォロー以上をいただく人文会には感謝しかありません。きつと仕掛けについては「改めてだな」と思っているかたも既存ファンのかたも勿論たくさんいらっしゃったと思うが、ファンを増やすことが大事なことは知ってくださっているはずです。

今年は『夜と霧 新版』みず書房の仕掛けをご協力いただきながらの展開をはじめました。今年のステップは出版社のかたをはじめ、人文書ファンのかた、人文会の皆様には「えええ！」と思われるかも知れないが、ハードルは高めです。実に高めです。

現在の書店は、本を売り、本以外も売る時代。それでも書店員は本を売りたい。

本のファンを増やす、人文書ファンを減らさないようにするのが私の成長の目指すところです。そのため来年の仕掛けをまた一緒に考えていただけたらと、ご教授をお待ちしている毎日です。

人文会とのご縁と、人文会ニュースへの期待

児玉 真也（長崎書店）

この機に人文会ニュースを創刊号から読んでみていたら、予想だになかったことに、一九七四年発行の第六号に当店の名前を見つけた。人文会ニュース創刊前から、人文会にとっての課題のひとつであったという特約店制度が発足し、第一回目でなんと当店も選定され、リストに掲載されていたのである。これまでまったく知らない事実であった。ちょっと驚いた。

特約店と認められるためにクリアすべき当時の三つの条件がこうである。①人文会会員版元十二社以上との常備契約。②会員社の人文図書の千冊以上の展示。③会員社の人文図書を年間三千冊以上販売。また、それぞれその七割くらいをクリアすると準特約店として認められるというものだった。

当店は今年で創業百三十六年、私は入社十五年、細かい沿革については知らないことの方がはるかに多いが、近年だけでも二度の店舗リニューアルを経て、売り場の規模を縮小してきている。だから、というわけではないが、今ではとてもクリアできそうにない条件だけに「うちも昔はすごかったんだなあ」と思わずにはいられなかった。ちょっと感動した。

二年に一度行われる選定のその後を追うと、当店は四回目まで特約店、五回目で準特約店に認められ、そして一九八五年、六回目の選定で名前が消失していた。ちょっと悲しかった。そして、

それなのに、今でも人文会のみなさんが仲良くしてくれているということが、とてもうれしかった。ありがとうございます。ひきつづきよろしく願います。

ともあれ当店は、今はもうそれほどの規模の販売はできないけれど、人文書の取扱いを重要視している。老舗として、ということもあるけれど、私としては単に、人の知的好奇心をひとかたならず掻き立てるジャンルだから、と言いたい気持ちがあるし、結構売れるから、ともちょっとだけ言いたい。棚占有率や売上構成比について問われれば決して効率的でないことは認めるが、味気のない店になってしまつては元も子もない。地味なイメージを持たれる人文書だが、店に彩りをもたらすのも人文書だし、それこそ“爆買い”が起きた時の派手さも随一だ。

今回の寄稿にあたり、弊社社長の長崎と話している中で見えてきた人文会ニュースへの要望がひとつ。近頃の「公共図書館の図書納入を地元書店から」という流れに大きな関心を寄せている。特に人文書ジャンルの価値や特性を考えた場合、地元書店が図書館に提案・協議・納入できる関係性はひとつの理想ではないだろうか。しかしながら、専門業者を含め、多くの書店が深掘りしにくいジャンルであろうことも容易に推測でき、だからこそチャンスだとも感じている。出版業界の大きなテーマとして注目されている「書店―図書館連携」で、人文書ジャンルにおいて成果を上げている好事例や、図書館側から書店へ要望する要素（値引きや装備を除いて）があればぜひ取り上げて頂きたい。人文会ニュースでの、図書館との関係性の構築や継続に役立つ情報・知見・ノウハウ等の紹介を今後期待しています。

効率と非効率の狭間で——知識と智慧について

西村 仁志（丸善仙台アエル店）

人文会ニュース150号、おめでとうございます。売場担当者時代、特に地方勤めだった頃は業界・人文会の動向を追うことが手っ取り早くできたので、レターボックスにDMを見つけると、いの一冊に開封していました。好きだったのは「15分で読む」シリーズで、中には15分では読めない骨太の小論もありましたが、ブックガイドもついており、店頭でミニフェアをすぐに行える、という意味でも非常に役立っていました。

さて、この度人文会様から「これからの人文書／人文会に期待すること」というテーマで文章を、と依頼を受けました。僭越ながらこのところ考えていたことをしたためてみたいと思います。今、世の中は効率を非常に重視する傾向にあり、特にコロナ禍以降、それは急速に進んできたように思われます。このような世の中にあつて、人文書に期待できることはなんでしょうか。弊社も含め、どこの書店でもそうであろうと思いますが、残念ながら人文書のトレンドは、しばらく前から下り坂にあります。この傾向はまさに世の中の効率化とパラレルな関係になっているのではないのでしょうか。たとえば人文書は、その特性上、目の前の問題に対して、その場で答えを与えてくれないことが多いです。今の世の中はなんでも「コスパ」「タイパ」を重視しており、あらゆることに速さが求められます。つまり、そもそも読み通すことさえ困難な書物もた

くさんある人文書は、仮に時間をかけて苦勞して読んだとしても、その場で問題解決に至れないので役に立たない、ということになります。実学と虚学などという言葉もありますが、そういう意味ではまさしく虚学。現実社会で役に立たないのであれば、自ずと敬遠されていきます。そうなる困るのは書店です。というのも、書店現場における効率化といえば、棚効率の良化であり、在庫を常に回せるような売場づくりを求められます。となれば、回転率の悪い人文書は、目の敵にされてしまいます。そのため、人文書売場の専有面積は縮小を余儀なくされ、読者との出会いの機会が奪われ、なお一層売れないという悪循環が発生します。どうすれば良いのでしょうか。

あいにく、具体的な解決策は（それこそ人文書には書いていないので）見出すことができません。ですが、希望は捨てたくありません。ヒントになりそうなのは、「知識」と「智慧」というキーワードだと考えます。個別の問題解決にすぐに使えるのは知識です。知識がたくさんあれば様々なケースに対応できるでしょう。ところが予期せぬことが起きたときには、知識だけでは立ち向かえません。そこで重要なのが、智慧です。知識というのは、有機的に使うことができ初めてその真価を発揮します。たくさんある知識を有機的に活かすことができるのは智慧のなせる技です。人文書はまさしくこの智慧を授けてくれると思います。

西洋の哲学者たちは古代から人間の普遍的な真理の追求を怠りませんでした。そうして現在まで生き残った多くの書物があります。今の時代に我々がそれらを読んでも、眼前の問題は解決できないかもしれませんが、それ以上に得られるものがあるはずです。人文書／人文会に期待することは、これまでもこれからもずっと変わりません。

人文会ニュース目次再録(1211-150号)

121号(15・8)

- 代表幹事挨拶 田崎洋幸
- 書店現場から 杉本 博
- 退職して
- ―図書館レポート―
- カリキュラムのキーワードを利用した分野別選書基準について
- ―亜細亜大学図書館の試み―
- ―編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑥―
- お金に困っている友だちに16万円を貸すかどうかについて 渡邊 光
- 2015年特約店グループ訪問報告
- 委員会活動方針
- 人文会活動報告
- 人文会年次総会報告

122号(15・12)

- ―15分で読む―
- アクティブ・ラーニングとはなにか
- ―「わかった」を引き出す授業を目指して―
- 書店現場から 森 朋子
- 丸善ジュンク堂書店 社内研修会について
- ―図書館レポート―
- ―編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑦―
- 神と、仏と、哲学と―「現代哲学への招待」への招待 吉田倫子
- 2015年特約店グループ訪問報告 小林公二
- 2015年研修旅行報告

123号(16・4)

- ―15分で読む―
- 憲法と国家権力の三大失敗―高校生・大学生に伝えたい憲法入門 木村草太
- 書店現場から
- 商品部と店舗の経験から考える人文書販売について
- ―図書館レポート―
- 北米研究図書館における電子化環境―コロンビア大学図書館を事例として 野口幸生
- ―編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑧―
- 非・現代思想のほうへ―revue de la non-pensee d'aujourd'hui 栗原一樹

124号(16・8)

- 代表幹事挨拶 田崎洋幸
- ―15分で読む―
- アメリカ大統領選挙の過去と現在
- ―書店現場から―
- 三月書房の「現在はどこにあるか」について二、三のこと 阿川尚之
- ―図書館レポート―
- わが国の公共図書館をどう育てるか 空戸立夫
- ―編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑨―
- 雑誌の消長と『こころの科学』 永田治樹
- 2016年特約店グループ訪問報告 遠藤俊夫
- 委員会活動方針
- 人文会活動報告
- 人文会年次総会報告

125号 (16・12)

15分で読む

15分で読むイスラーム

書店現場から

あの日から一年たって

図書館レポート

「ライブ・イン・ライブラリー」——考える、話す、伝え合う。また考える

編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑩

『日本近代の歴史』(全6巻)

2016年研修旅行報告

2016年研修旅行報告

2016年研修旅行報告

126号 (17・4)

15分で読む

レジリエンスという交差点(カルフル)

——「私の」から「私たちの」社会文化レジリエンスに向けて

書店現場から

今井書店外商部の営業活動について思うこと

図書館レポート

石川県西田幾多郎記念哲学館の歩み

編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑪

『トーマス・マン日記』全十巻について

『トーマス・マン日記』全十巻について

127号 (17・8)

代表幹事挨拶

15分で読む

LGBT(Q)

——セクシュアル・マイノリティと教育、学校

書店現場から

「本のビオトープ」

橋爪大三郎

鈴木慎二

成田康子

阿部又一郎

古泉淳夫

中嶋優太

伊藤暢章

田崎洋幸

吉谷武志

奈良敏行

図書館レポート

顧客としての公共図書館——出版社と図書館の相互理解のために

編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑫

『わたしらしく、LGBTQ』(全4巻)

2017年特約店グループ訪問報告

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告

128号 (17・12)

15分で読む

マルクスの偉大さ

特別寄稿1

特別寄稿2

八戸ブックセンターの歩みとこれから

特別寄稿1

書評欄のつくり方

編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑬

考えるとはどういうことか——加藤尚武著作集刊行の意義

2017年研修旅行報告

2017年研修旅行報告

129号 (18・8)

代表幹事挨拶

15分で読む

天皇の歴史

書店現場から

3度目の挑戦——未来をつなぐ書店に

図書館レポート

公共図書館と「出版」——千代田図書館10年の取り組みから

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告

佐藤達生

岩下 結

佐々木隆治

音喜多信嗣

野中彰久

西谷能英

田崎洋幸

倉本一宏

石崎久康

河合郁子

130号 (18・12)

— 図書館レポート —

大学図書館に求められる役割——武庫川女子大学附属図書館の取り組みから

川崎安子

— 書店現場から —

ハイブリッド型総合書店 honto

松原嘉哉

15分で読む一覽

— 編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑭ —

『シリーズ 精神医学の哲学』（全三巻）とその背景

2018年研修旅行報告

2018年特約店グループ訪問報告

住田朋久

131号 (19・4)

15分で読む

平成の「出版界」——専門書と書籍流通の30年

— 書店現場から —

文喫六本木——新しい本屋の実験

— 図書館レポート —

本の生態系のために、図書館ができること

— 編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑬ —

『中井久夫集』刊行までのこと

伊藤 晃・有地和毅

大林正智

守田省吾

132号 (19・8)

代表幹事挨拶

— 図書館レポート —

日販図書館選書センターの歩みとこれから

— 小中学校図書館選書の現場報告

— 書店現場から —

ハイブリッドな現場としての書店——イベントの取組みの紹介を通して

田崎洋幸

渡邊真嗣

磯前大地

— 編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑬ —

《中世から近世へ》シリーズ、刊行の経緯など

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告

133号 (19・12)

15分で読む

生誕250周年を機に、ヘーゲルへの誤解をとく

— 書店現場から —

大垣書店京都本店——京都の書店の新しい取り組み

— 図書館レポート —

あま市美和図書館の取り組み

2019年特約店グループ訪問報告

2019年研修旅行報告

岡本裕一朗

山田清貴

千邑淳子

134号 (20・4)

15分で読む

「アイヌ文化」の歴史と現在

— 書店現場から —

人文書フェアを終えて

— 図書館レポート —

課題解決型図書館オーテピア高知図書館の取組み

— 編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑪ —

季刊誌『発達』40歳——「発達」を育む旅をつづけて

中川 裕

亥角理絵

山重壮一

丸山 碧

135号 (20・8)

代表幹事挨拶

15分で読む

九月入学はなぜ必要か

田崎洋幸

橋爪大三郎

坂田修治

—書店現場から—
沖縄書店大賞、これまでとこれから

—図書館レポート—

新型コロナウイルスと司書のいる高校図書館

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告

136号 (20・12)

—15分で読む—

ホロコーストはなぜ起こったか

—書店現場から—

本棚から考える「読書の学校」

—図書館レポート—

授業で学校図書館を活用する

—編集者が語るこの叢書・このシリーズ18—
—体育の授業で本を使う(豊田市立萩野小学校の実践から)

—パルマケイア叢書から叢書パルマコンへ—

137号 (21・4)

—15分で読む—

ナポレオン没後二百年

—書店現場から—

コロナ禍での書店イベント

—図書館レポート—

図書館から広げる電子書籍

—編集者が語るこの叢書・このシリーズ19—

『近代日本宗教史』と宗教教学

—編集者が語るこの叢書・このシリーズ20—

シリーズ『日本宗教史』と人文学

森本浩平

木下通子

田野大輔

三砂慶明

塩谷京子

山口泰生

楠田悠貴

森 暁子

花田一郎

水野柊平

石津輝真

138号 (21・8)

代表幹事挨拶

—15分で読む—

ジャック・ラカン生誕120周年によせて

—書店現場から—

置いてある本「が」売れる

—図書館レポート—

可能性の持久力

—「新しい図書館」たろうとするせんだいメディアテークの20年目
—編集者が語るこの叢書・このシリーズ21—

一冊の武器の向こうに

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告

139号 (21・12)

—15分で読む—

現代社会とマンガ

—書店現場から—

顔の见えない(ツ)ネット書店でフェアをする、ということ

—図書館レポート—

マンガ専門図書館の現場から——明治大学 米沢嘉博記念図書館・現代マンガ

図書館の複合運用とサービスについて

—編集者が語るこの叢書・このシリーズ22—

シリーズ・ちくまQブックス

—15分で読む—

140号 (22・4)

—15分で読む—

沖縄(復帰)50年を考える

—書店現場から—

街の本屋を続ける理由

片桐幹夫

松本卓也

小林えみ

小川直人

楠本龍一

中条省平

安川康成

三崎絵美・信濃 潔

吉澤麻衣子

新城和博

木村 晃

—図書館レポート—

荒尾市 図書館＋書店プロジェクト、地域の活性化と本の力

藤戸克己・花田吉隆

—編集者が語るこの叢書・このシリーズ②③—
サビエンティア・シリーズ

奥田のぞみ

141号 (22・8)

代表幹事挨拶

片桐幹夫

—15分で読む—

いま読み返すフロイトの戦争論——自己愛による破壊から死の欲動へ

片岡一竹

—書店現場から—

日中国交正常化50周年と東方書店

田原陽介

—図書館レポート—

図書館をもっと楽しく……カールル

吉本龍司

—編集者が語るこの叢書・このシリーズ②④—

世界を読み解く一冊の本

上村和馬

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告

142号 (22・12)

—15分で読む—

滅亡二〇〇年 オスマン帝国の歴史

小笠原弘幸

—書店現場から—

お茶と読書 時によって礼拝

西田今日子

—図書館レポート—

劇場としての図書館、あるいは蜘蛛のストラテジー

—近畿大学図書館の取り組み

八角聡仁

—編集者が語るこの叢書・このシリーズ②⑤—

「中学生の質問箱」シリーズ

吉田真美

2022年秋季グループ訪問報告

143号 (23・4)

—15分で読む—

生誕300年目のアダム・スミス

—書店現場から—

今日も今日とて消費されない本を売る

—図書館レポート—

図書館、出版業界を取り巻く情勢と提案

—編集者が語るこの叢書・このシリーズ②⑥—

シリーズ「あいだで考える」創刊に寄せて

2022年秋季グループ訪問報告

野原慎司

小谷輝之

菊池壮一

内貴麻美

144号 (23・8)

代表幹事挨拶

片桐幹夫

—15分で読む—

関東大震災100年

尾原宏之

—書店現場から—

紀伊國屋書店新宿本店アカデミック・ラウンジについて

後藤 崇

—図書館レポート—

企画展示と図書館——展示を通じた司書の人材育成

河合郁子

—編集者が語るこの叢書・このシリーズ②⑦—

ミネルヴァ書房「論点」シリーズ

岡崎麻優子

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告

145号 (23・12)

—15分で読む—

平安時代の女性たち

京樂真帆子

—書店現場から—

共有書店マスタの活動、これから

古澤 亘

編集者が語るこの叢書・このシリーズ⁽²⁵⁾
『完訳版』第二次世界大戦』(全6巻)

146号 (24・4)

- 15分で読む—
「いじめ」はだれに見えているのか
書店現場から—
新しい街「麻布台ヒルズ」で「普通の本屋」を目指して
図書館レポート—
神奈川県立図書館の新しい本館が始まった
「Lib活(リブカツ)」の紹介
編集者が語るこの叢書・このシリーズ⁽²⁶⁾
「別冊太陽」——資料とグラフィックに溺れて
2023年秋季グループ訪問報告

三村 純

内田 良

赤井良隆

山下樹子

日下部行洋

片桐幹夫

宮崎裕助

和氣正幸

丸瀬晃一

荒木 駿

- 編集者が語るこの叢書・このシリーズ⁽²⁷⁾
これからこの図書館に必要なこと
未知の沃野を掘りおこす
——「アジア芸芸ライブラリー」のいままでこれから
委員会活動方針
人文会活動報告
人文会年次総会報告

148号 (24・12)

- 15分で読む—
何と出会ったのか、いくつかの回想——百歳のドゥルーズに
図書館レポート—
図書館における読書バリアフリーの現在地——公立図書館を中心に
2024年グループ訪問報告
2024年秋季研修旅行報告
野口武悟

宇野邦一

149号 (25・4)

- 15分で読む—
C・G・ユングの思想を振り返る
図書館レポート—
知の創造的遺産——上智大学中世思想研究所の挑戦
編集者が語るこの叢書・このシリーズ⁽²⁸⁾
ロシア語文学のミノタウロスたち
胡 婧・佐藤直子
栗本麻央

猪股 剛

150号 (25・9) 150号記念号

- 代表幹事挨拶
人文会の活動を振り返って
人文書を好きな人が増えたら、世界は今よりもよくなると思いませんか
人文会ニュース150号によせて—
何でも置ける人文書棚のいかに作るか
人文書を売るということ
人文会との縁と、人文会ニュースへの期待
効率と非効率の狭間で——知識と智慧について
人文会ニュース目次再録(121～150号)
委員会活動方針
人文会活動報告
人文会年次総会報告

片桐幹夫

田崎洋幸

中村隆之

東二町順也

大屋恵子

児玉真也

西村仁志

広報委員会

委員長 乙子 智

委員長・副委員長が交替し、メンバーが一人減の3人となった新体制の広報委員会は、今期も『人文会ニュース』の発行とウェブサイトの運営という二本柱を例年どおり継続いたします。

今期もこれまで通り『人文会ニュース』は年3回(8月、12月、4月)のスケジュールでの発行を目指します。人文会の活動を広く知らせるという役割を基本とし、書店や図書館の人文書担当の方に人文書の魅力をより深くお伝えするとともに、日常の業務に役に立つようなコンテンツを提供していきたいと考えています。また、本誌は今号を持ちまして通算150号に到達しました。諸先輩方が積み重ねてこられたものを受け、更に充実した内容を目指していきたいと存じます。

ウェブサイト(<https://www.jinbunkai.com/>)は、人文会と会員各社の情報提供の場として引き続き内容の充実を図っていきます。また、ウェブサイトと連動したX[旧Twitter](@jinbunkai)での投稿配信も軌道に乗り、小会の活動や会員各社のおすすめの書籍がよりタイムリーに発信されていますのでご覧いただければ幸いです。

今期も紙媒体とウェブ媒体、それぞれの特性を活かし、かつ補完し合いながら、人文会と人文書の普及、発展を目指しますので、何卒よろしくお願いいたします。

委員長 乙子 智(慶應義塾大学出版会) 中沢佑次(白水社)

副委員長 本橋弘行(ミネルヴァ書房)

調査・研修委員会

委員長 森 卓巳

昨年は、研修活動の一環としてN-PORT新座の見学会を実施いたしました。日販グループ全体で取り組む「物流再編プログラム」の新拠点を見学することで、出版取次業の次なる戦略の一面を垣間みることができ、貴重な機会となりました。

今年も、前期にトーハン桶川倉庫への見学会を計画しています。日常業務の中でつながりの深い取次倉庫を、会員社全体で見学会として実施することで、見え方や気づきも新たなものと期待しています。

また、会員社内の課題案件を吸い上げ、アンケート形式で各社の知見や情報を共有する取り組みを実施いたしました。具体的には、「情報セキュリティ管理 実施状況について」や「生成AIを含むオンラインツールの営業面での活用状況」について調査いたしました。自社の課題に取り組む上で、他社の事例は大変役立つ情報であり、それが結果として人文会会員社であることのメリットにつながります。前期に続きそのような機会の拡大を目指します。

さらに、数グループを編成し、全国の書店・公共図書館や大学生協などへ訪問する活動を毎年行っていますが、この訪問地域を選定するのも小委員会の役割になります。来春の実施に向けて委員会内で熟議し提案いたします。

まとめると、販売・企画委員会、広報委員会と連携し、会員各社にとって有益な活動になるよう一年間努めてまいります。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

委員長 森 卓巳(青土社) 河内秀憲(筑摩書房)
副委員長 束原亮佑(勁草書房)

委員会活動方針

販売・企画委員会

委員長 吉岡 聡

販売・企画委員会は休会・復会の影響もあるなか新たに2名を迎えることができました。今期も情報発信・ブックフェア・外商にまつわる各施策へ委員一丸となって取り組む所存です。

小会各社の新刊・話題書・ロングセラーの定期的な情報発信のためのツール3種のうち、「今月の一押しFAX」・紙版「新刊案内パック」(※ともに月1回)は従来通りですが、2017年の初回発行以来、好評をいただいていた「高校生のためのブックガイド」を製作費と輸送費の高騰、信書問題といった喫緊の課題に向き合い「[人文会おすすめ] 高校生向けブックガイド」と改称・大規模リニューアルを実施しました。年1回毎春発行を予定しておりますので変わらぬご愛顧を賜りますようお願いいたします。

全国有力書店での定期的なフェア開催は、引き続き積極的に実施していきます。特に紀伊國屋書店様では店売常設棚施策「人文書 今月のイチ推し」フェアが全国14店舗で立ち上がり、本年2月に九州5店舗、今期6月には更に各地の4店舗が加わり、開始1年で計23店舗にて展開いただく大型企画へと成長を果たしました。学術和書部様とのBookWeb Pro施策も今後更なる充実を図るため意見交換を深めて参ります。来年神田神保町本店のオープンを控える三省堂書店様では全国主要8店舗での常設棚施策「本の街 神田神保町発! 人文書 自信のオススメ」に加え、「戦後80年・昭和100年」等の今年ならではのラインナップを盛り込んだ大規模フェアも予定しています。

今期も全国の書店様・販売会社様、関係各所のみなさまと連携・協働し、人文書の普及・販売のために尽力して参る所存です。1年間よろしく願い申し上げます。

委員長 吉岡 聡(春秋社)

副委員長 段塚省吾(紀伊國屋書店)

佐藤信治(大月書店)

郡司恵太(誠信書房)

足立 佑(東京大学出版会)

荻原弘和(日本評論社)

4. 各委員会活動報告
5. その他

●コーチャンフォー道内6店舗同時フェア「知の森を歩く 人文書フェア」 担当：販売・企画委員会 吉岡（春秋社）

期日：2025/4/上旬～

○人文会ニュースNo.149刊行

2025年4月発行（32頁、5,000部）

15分で読む：猪股剛（C. G. ユングの思想を振り返る）

図書館レポート：胡婧・佐藤直子（上智大学中世思想研究所）

編集者が語る：栗本麻央（ロシア語文学のミノタウロスたち、白水社）

☆4月例会

期日：2025/4/18 15:00～17:00

場所：東京大学出版会会議室

代理出席：青土社

1. 代表幹事より
2. 第58回総会案内
3. 紀伊國屋書店施策
4. グループ訪問について
5. 委員会報告
6. その他

●「[人文会おすすめ] 高校生向けブックガイド2025」発行 担当：段塚（紀伊國屋書店）・佐藤（大月書店）

15,000部 4月発行

3. 各委員会活動報告
4. その他 情報交換

●紀伊國屋書店新宿本店「心理学専門書マスト100フェア」担当：販売・企画委員会 郡司（誠信書房）

期日：2024/12/19～2025/1/22 122冊・267,700円

●練馬区立図書館 現物選書会 担当：販売・企画委員会 佐藤（大月書店）

期日：2025/1/30 選書実績 380冊・1,593,141円

○調査・研修委員会主催研修会

「日販グループ N-PORT新座見学会」

期日：2025/2/13 10:00～12:00

参加者：会員社 16名

○紀伊國屋書店研修会

「人文書イチ推し施策フォローアップ研修会」

期日：2025/2/21 14:00～16:00 ハイブリッド開催

会場：紀伊國屋書店新宿本店9階イベントスペース

参加者：紀伊國屋書店 83名（現地参加4名）

会員社 現地参加17名

☆2月例会

期日：2025/2/21 16:00～17:30

場所：紀伊國屋書店新宿本店9階イベントスペース

1. 代表幹事より
2. 紀伊國屋書店施策
3. グループ訪問について
4. 各委員会活動報告
5. その他

☆3月例会

期日：2025/3/21 15:00～16:30

場所：筑摩書房会議室

オンライン参加 晶文社・法政大学出版局

代理出席 筑摩書房

1. 代表幹事より
2. 紀伊國屋書店施策
3. グループ訪問について

営業推進部 係長 小泉佳代様

- ツタヤブックストアそよら成田ニュータウン店「人文書定番書フェア」担当：販売・企画委員会 栗生（平凡社）

期日：2024/10/1～11/30 46冊・89,280円

- BOOKSなかだ「知の森を歩く 人文書フェア」担当：販売・企画委員会 吉岡（春秋社）

期日：2024/9/21～12/13

掛尾本店 241冊・492,960円

魚津店 107冊・211,760円

ファボーレ店 43冊・74,700円

イオンかほく店 79冊・155,580円

砺波店 21冊・103,970円

- 紀伊國屋書店BookWebPro基本書・ロングセラー販促用特設ページ設置&プロモーションメール配信

2025/3までの受注実績 2,175冊・7,362,221円

☆12月例会

期日：2024/12/20 15:00～17:10

場所：筑摩書房会議室

欠席 筑摩書房

1. 代表幹事より
2. 紀伊國屋書店研修会
3. 各委員会活動報告
4. その他 情報交換

○人文会ニュースNo.148刊行

2024年12月発行（48頁、5,000部）

15分で読む：宇野邦一（何と出会ったのか、いくつかの回想）

図書館レポート：野口武悟（図書館における読書バリアフリーの現在地）

2024年グループ訪問報告

2024年秋季研修旅行報告

☆1月例会

期日：2025/1/17 15:00～17:00

場所：筑摩書房会議室

代理出席 東京大学出版会

1. 代表幹事より
2. 紀伊國屋書店研修会

☆9月例会

期日：2024/9/20 14:00～16:30

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
2. 秋季研修旅行について
3. 各委員会活動報告
4. その他
5. 株式会社バブリ様来会 16:30～17:00
営業局 統括部長 吉田法義様
営業局 部長 小野智生様
事業内容紹介

- 三省堂書店名古屋本店「人文学を彩る書物たち」担当：販売・企画委員会 郡司(誠信書房)

期日：2024/8/21～9/30 1,082冊・1,992,550円

○秋季研修旅行

10/16～18 熊本・鹿児島・宮崎

- 金高堂書店 人文書フェア 担当：販売・企画委員会 郡司(誠信書房)

期日：2024/9/14～11/4

本店 547冊・999,820円

朝倉ブックセンター 203冊・424,608円

期日：2024/8～2024/12

外商部 198冊・430,190円

☆11月例会

期日：2024/11/15 14:30～16:00

場所：文化産業信用組合 大会議室

1. 代表幹事より
2. 秋季研修旅行報告
3. 各委員会活動報告
4. その他
5. 株式会社三省堂書店様来会 16:00～17:00
新神保町本店開店準備室 室長 杉本佳文様
新神保町本店開店準備室 次長 岡田健太郎様
営業推進部 部長 菊池晋様
営業推進部 部長 藤原哉様

モール店」

☆6月例会

期日：2024/6/21 15:00～17:20

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
2. 秋季研修旅行について
3. 各委員会報告
4. グループ訪問報告(北陸・九州・大阪)
5. その他

担当者変更 東京大学出版会

- 三省堂書店そごう千葉店「知の森を歩く 人文会フェア」担当：販売・企画委員会 佐藤(大月書店)

期日：2024/5/1～6/25 447冊・771,200円

- 笠原書店本店 「2団体合同専門書フェア」

期日：2024/4/15～6/13 105冊・196,990円

- コーチャンフォー若葉台店フェア 担当：販売・企画委員会 吉岡(春秋社)

期日：2024/3/4～11/6 325冊・549,200円

☆7月例会

期日：2024/7/19 15:00～17:10

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
2. 秋季研修旅行について
3. 各委員会報告
4. グループ訪問報告(中四国)

○人文会ニュースNo.147刊行

2024年8月発行(52頁、5,000部)

代表幹事挨拶

15分で読む：宮崎裕助(母語の狂気から他者の単一言語使用へ)

書店現場から：和氣正幸(BOOKSHOP LOVER)

図書館レポート：丸濱晃一(ミライエ長岡互尊文庫)

編集者が語る：荒木駿(アジア文芸ライブラリー、春秋社)

総会報告、活動報告、委員会活動方針

委員会の構成メンバーを選考。

以下の人事を決定。

9 2024年度の役員および各委員会メンバーの発表

- ・代表幹事 片桐 幹夫(みすず書房)
 - ・会計幹事 片山 伸治(吉川弘文館)
 - ・書記幹事 水口 大介(創元社)
 - ・販売・企画委員会 ◎吉岡 聡(春秋社) ○段塚 省吾(紀伊國屋書店)
佐藤 信治(大月書店)・福土 篤太郎(晶文社)・
郡司 恵太(誠信書房)・栗生 恵子(平凡社)
 - ・調査・研修委員会 ◎森 卓巳(青土社) ○東原 亮佑(勁草書房)
澤畑 壘(東京大学出版会)・河内 秀憲(筑摩書房)
 - ・広報委員会 ◎岩野 忠昭(白水社) ○乙子 智(慶應義塾大学出版会)
三木 拓(法政大学出版局)・本橋 弘行(ミネルヴァ書房)
- 《◎委員長(幹事) ○副委員長》

10 三役と各委員長挨拶

11 事務連絡

17:00 終了

○特約店グループ訪問

- ・5/29～31 北陸・群馬グループ：◎法政大学出版局(三木)・慶應義塾大学出版会(乙子)・創元社(水口)・みすず書房(片桐)・吉川弘文館(片山)
- ・6/5～7 福岡・佐賀・長崎グループ：◎ミネルヴァ書房(本橋)・大月書店(佐藤)・勁草書房(東原)・平凡社(栗生)
- ・6/17～19 大阪グループ：◎春秋社(吉岡)・紀伊國屋書店(段塚)・晶文社(福土)・東京大学出版会(澤畑)※一部のみ参加・創元社(水口)
- ・6/26～28 中国・四国グループ：◎青土社(森)・誠信書房(郡司)・筑摩書房(河内)・白水社(岩野)

(◎班長)

●三省堂書店「本の街 神田神保町発！ 人文書 自信のオススメ」⇒継続中

●紀伊國屋書店BookWebPro施策⇒継続中

●紀伊國屋書店「人文書 今月のイチ推し」

・2024年6月から14店舗で実施

「アミュプラザおおいた店」「さいたま新都心店」「長崎店」「佐賀店」「流山おおたかの森店」「グランフロント大阪店」「富山店」「広島店」「徳島店」「国分寺店」「前橋店」「横浜店」「泉北店」「西武渋谷店」

・2025年2月から5店舗追加となり19店舗に拡大

「久留米店」「熊本光の森店」「熊本はません店」「アミュプラザみやぎ店」「あらおシティ

2024年度(2024.5～2025.4)人文会活動報告(全般)

書記 水口大介

☆第57回(2023年度)人文会総会

期日：2024/5/17 14:00～

場所：文化産業信用組合 会議室

出席者：正担当者16名 副担当者1名

14:00開始

総会の開催

1 代表幹事挨拶

2 総会議長選出

* 総会議長は慣例に従い前年度の書記幹事(水口)が務める。

3 2023年度活動報告

ア) 会活動全般 (書記：水口)

イ) 会計報告 (会計：片山)

4 2023年度各委員会活動報告

ア) 販売・企画委員会 (委員長：吉岡)

イ) 調査・研修委員会 (委員長：森)

ウ) 広報委員会 (委員長：岩野)

5 会則の改廃

* 今回は提案なし。

6 退会・休会・入会について

休会の報告：日本評論社

7 担当者変更の報告

* 今回は変更の申請なし。

8 役員の改選及び各委員会構成について

ア) 代表幹事選出

議長より片桐氏を推挙。全会員賛同にて片桐代表幹事留任を決定。

イ) 選考委員選出

出席者による2名連記投票で票数の多い上位4名を選出。

ウ) 書記幹事、会計幹事および各委員会委員長名を選出 【別室】

選出された選考委員4名と代表幹事の計5名にて協議。以下の人事を決定。

会計(片山)／書記(水口)／販売・企画(吉岡)／調査・研修(森)／広報(岩野)

エ) 各委員会の構成メンバーの選任 【別室】

* 選出された幹事(代表幹事、書記、会計と3委員長)により各員の希望も考慮し、

2024年度(第58回)人文会年次総会報告

書記幹事 水口大介

2024年度(第58回)の人文会年次総会は、2025年5月16日、「筑摩書房・会議室」において全会員社出席のもとに開催されました。

議事は、2024年度(2024年5月1日～2025年4月30日)の活動報告(全般)から始まり、会計報告、次いで「販売・企画」「調査・研修」「広報」の各委員会報告および質疑応答、承認と続き、新年度に向けての役員改選および各委員会所属メンバーを決定し、無事終了いたしました。

代表幹事には、昨年度に引き続き、全会一致で片桐幹夫氏(みすず書房)が選出されました。

会計幹事は片山伸治氏(吉川弘文館)、書記幹事は水口大介(創元社)が選出(いずれも留任)されました。委員会構成は昨年同様、「販売・企画」「調査・研修」「広報」の三委員会体制で会活動にあたることを確認しました。

各委員長(幹事)は、吉岡聡氏(春秋社)が販売・企画委員長(留任)、森卓巳氏(青土社)が調査・研修委員長(留任)、乙子智氏(慶應義塾大学出版会)が広報委員長(新任)に選出されました。

また、日本評論社の復会および晶文社・平凡社・法政大学出版局の休会が承認されました。

なお、各委員会の構成は、巻末の「人文会会員名簿」をご参照ください。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2025年9月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	佐藤信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	03-3813-4651	03-3813-4656
紀伊國屋書店	段塚省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	03-6910-0519	03-6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	03-3451-6926	03-3451-3124
勁 草 書 房	束原亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	03-3814-6861	03-3814-6854
春 秋 社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	03-3255-9611	03-3253-1384
晶 文 社 (休会中)		101-0051	千代田区神田神保町1-11	03-3518-4940	03-3518-4944
誠 信 書 房	郡司恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	03-3946-5666	03-3945-8880
青 土 社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	03-3294-7829	03-3294-8035
創 元 社	水口大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	06-6231-9010	06-6233-3111
筑 摩 書 房	河内秀憲	111-8755	台東区蔵前2-5-3	03-5687-2680	03-5687-2685
東京大学出版会	足立 佑	153-0041	目黒区駒場4-5-29	03-6407-1069	03-6407-1991
日本評論社	荻原弘和	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	03-3987-8621	03-3987-8590
白 水 社	中沢佑次	101-0052	千代田区神田小川町3-24	03-3291-7811	03-3291-8448
平凡社 (休会中)		101-0051	千代田区神田神保町3-29	03-3230-6572	03-3230-6587
法政大学出版局 (休会中)		102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	03-5214-5540	03-5214-5542
み す ず 書 房	片桐幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	03-3814-0131	03-3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	03-3525-8460	03-3525-8461
吉 川 弘 文 館	片山伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	03-3813-9151	03-3812-3544

代表幹事 片桐幹夫

会計幹事 片山伸治

書記幹事 水口大介

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

販売・企画委員会 ◎吉岡 聡 ○段塚省吾 佐藤信治・郡司恵太・足立 佑・荻原弘和

調査・研修委員会 ◎森 卓巳 ○束原亮佑 河内秀憲

広報委員会 ◎乙子 智 ○本橋弘行 中沢佑次

人文会ホームページ <https://www.jinbunkai.com/>

(各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

浅田彰『逃走論』、國分功一郎『中動態の世界』につづく、時代を画する新たな傑作の誕生！

松本卓也

斜め論

—空間の病理学—

ケアは、どうひらかれたのか？「生き延びと当事者の時代」へと至る「心」の議論の変遷を跡付ける。垂直から水平、そして斜めへ。

●定価2420円

筑摩書房

営業部 03-5687-2680

*定価は10%税込です。

<https://www.chikumashobo.co.jp/>

カップルセラピーの

教科書

上 ふたりのキッチン編
下 ブロッコリーの花言葉編

●各600円

三田村仰著

カップルセラピーの実用的な知識から歴史や研究など知的好奇心を満たすコミカルな解説まで、すべてを詰め込んだ著者渾身のテキスト。

去られるために そこに在る

田中茂樹「著」

9刷



子育てに悩む親との心理臨床
子どもの「問題」には必ず大切な意味がある。カウンセリングの事例から見えてくる親の役割や子どもへの接し方をやさしく伝える。●1870円

日本評論社 03-3987-8621 (営業部)
<https://www.nippyo.co.jp/>

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 表示価格は税込価格

人文書販売の手引き

第3版



- 哲学・思想
- 心理
- 宗教
- 歴史
- 社会学



https://jinbunkai.com/jb_contents/tebiki-3rd/

田原史起

中国農村 曼陀羅

円環する郷土と暮らし



雑多な要素が複雑に織り成す謎に満ちた中国農村の秩序＝曼陀羅図を読み解く。

3,960円(税込)

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<https://www.utp.or.jp/>



思想の地平線

遠のきつつある思想にふたたび光をあて、
混迷する現代を新たに読み解く手がかり
となるシリーズ、刊行開始

ニーチェ 西尾幹二訳
偶像の黄昏／アンチクリスト
三島憲一、吉本隆明解説 ●1,980円

ニーチェ 浅井昌男訳
悲劇の誕生 あるいはギリシア精神と悲観論
納富信留解説 ●1,870円

アラン 串田孫一、中村雄二郎訳
幸福論
高山裕二解説 ●1,760円

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 ●価格税込

河内と船場

—メディア文化にみる大阪イメージ—

ステレオタイプな大阪イメージの起源に迫り、衰退
しいまちの来し方行く末をみつめる。 税込3080円

山本昭宏編著

酒場の京都学

縄文簾にしてみえてくる歴史とは。

おいしい京都学

●料理屋文化の歴史地理

加藤政洋著
税込2750円

加藤政洋著
河角直美著
税込2750円

税込2750円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込／宅配可

コンパートメント No.6

リクソム 寡黙な少女と出稼ぎ夫。シベリア鉄道で偶然乗合
せた二人の旅。フィンランディア賞受賞 未延弘子訳 三〇〇円

八重山の1945年

大田静男 米軍の沖縄上陸戦直前、国防最前線の日々。英米・
日本軍・住民の資料を駆使、視線が交差する戦争史。 三〇〇円

家族の深淵

中井久夫 往診先家族と医師の関係を描く表題作ほか、精神
科医の観察と感受と寛容が生んだエッセイ。『新装版』三〇〇円

「昭和」を送る

中井久夫 臨床経験を描く四編、昭和天皇逝去にあたって書
いた表題作、いじめについて… 全三九編。『新装版』三〇〇円

みすず書房 (税込)

東京文京本郷2-20-7 www.mszo.co.jp

大坂の歴史

難波宮・荘園・天下の台所

五味文彦著 巨大古墳の
築造から鳥羽・伏見の戦
いまで、摂津・河内・和泉
の歴史を平易に解説する
格好の通史。 2530円

歴史文化ライブラリー

勲章の近代史

刑部芳則著 権威と欲望のメカニズム
人間模様とともに描く、はじめての勲章の歴史！ 2420円

老いと介護の日本史

新村 拓著 古来、老化にともなう病や認知症がいかに認識さ
れ、患う人びとがどのように介護されてきたのか。 1870円

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2-8
☎03-3813-9151 税込

慶應義塾大学出版会

<https://www.keio-up.co.jp/>

動物たちの江戸時代

井奥成彦編著 江戸時代、人と動物たちはどのような関係であったのか？ 動物たちとのかかわりを、古文書読みに長けた動物好きの専門家たちが描く。

◎2,640 円

メディアとしての福沢諭吉

表象・政治・朝鮮問題

都倉武之著 福沢諭吉をメディアそのものとして捉え、様々な矛盾が指摘されるその言説を、「交通」の最大化、「文明主義」の拡大と継続を目的とした、一貫した思想として読み解く。◎4,950円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 [価格税込]
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

戦争を展示する

戦争博物館は「何のために、何を、いかに」展示しているのか。世界の博物館から56館を選び、設立経緯や展示物概要を提示。また、博物館を取り巻く問題について考察する。

【編著】佐々木真
原田敬一 松本彰
【定価】4400円(税込)

ラディカル・マスキュリズム

男らしさ、身体、ヘゲモニー、ミサンドリーの視点から「男」に向き合い、男性たちが自信の性(生)を豊かにするための思考と実践を探究。

【著】周司あきら
【定価】2970円(税込)

大月書店

〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-16

TEL 03-3813-4651 HP otsukishoten.co.jp

わたしの上海游記

揚子江のほとりで本を読む

かしん
夏申 著

定価2,750円

「中国でもっともらしく語られる日本人論にも、また日本でもてはやされる中国人論にも、違和感ばかりを覚えてしまおう——上海の大学で日本文学と日本文化を教える「外教」(外国籍教師)である著者が、コロナ禍の上海を歩き、数多の本を読みながら、「上海について、上海を通して、上海をきっかけにして」縦横無尽にめぐらした思考の軌跡。

行為の哲学入門

サラ・K・ポール 著／萬屋博喜 訳

行為とは何か。何が出来事を行為にするのか。理由による行為の合理化説明とは。意図的行為とは。

ケアする私の「しんどい」は、
どこからくるのか 税込2530円

見えないケア責任を語る言葉を紡ぐために
山根純佳・平山 亮

ケアをめぐる「常識」が作り出す困難と、日常生活に織り込まれた見えないジェンダー不均衡に迫る。

アザー・オリンピアニス 税込3520円

排除と混迷の性別確認検査導入史
マイケル・ウオーターズ 著／ニキリンコ 訳／井合聡子 解説
ファッションに揺れる1930年代、「女に見えない」、そう言われた選手たちがいた。

勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<https://www.keisoshobo.co.jp>

紀伊國屋書店 出版部:東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519

2025年9月25日発行 年3回発行 第150号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉